



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「詩を評価する者」としての「山村暮鳥」 : 「評価行為」が明らかにする詩の概念系・実践系の様態の検討
Author(s)	竹本, 寛秋
Citation	雲, 16, 42-55
Issue Date	2011-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47056
Type	journal article
File Information	takemoto.pdf



「詩を評価する者」としての「山村暮鳥」

— 「評価行為」が明らかにする詩の概念系・実践系の様態の検討

竹本 寛秋

一 はじめに

山村暮鳥の詩集『聖三稜玻璃』は、出版当時においても現在においても評価の分かれる詩集である。先駆的な試みとして高く評価する立場がある一方、表現の必然性がないとして非難する立場もあることは、周知の事実である。

さて、しかし、本稿が行いたいことは、詩集『聖三稜玻璃』を評価することではない。また、「山村暮鳥」という詩人を評価することでもない。

本稿で行いたいことは、逆に、「詩を評価する者」としての「山村暮鳥」の検討である。暮鳥は、明治四十三年に『仙台日々新聞』『秋田魁新聞』の詩の選者を依頼されたのをはじめとして、その後『秀才文壇』『新評論』といった雑誌において詩の選者を担当する。暮鳥が設立した「新詩研究社」では、「懇切に批評添削」することを行っているし、¹暮鳥の主宰する『風景』や『LE PRISM』などで、掲載詩を選ぶのは必然的に山村暮鳥となるだろう。²大正八年からはじまる『おとぎの世界』での童謡の選者を含め、暮鳥は、詩人としての活動期間のほとんどにおいて、「詩を評価する」立場の存在でもあり続けたのである。

「評価する者」の視点から山村暮鳥を捉え直すこと。そこにおいて山村暮鳥が持つ「評価観」を丹念に分析するならば、そこから「評価すること」がはらむ葛藤や矛盾、揺れが顕在化してくる。もちろん、筆者はここで、山村暮鳥の一貫性の無さを非難する気はまったくない。実際問題として、「詩」ひいては「文学」をはかる絶対的な尺度は存在しないし、むしろ、山村暮鳥は、「詩を評価すること」の不可能性、困難さへの自覚を持ち続けた詩人である。その自覚を持ちつつ、山村暮鳥は「詩を選ぶ者」としての活動を続けている。

「評価する者」として山村暮鳥を捉え直すこと。そのことは、「評価する者／評価される者」の亀裂の中で、『聖三稜玻璃』という問題含みの詩集を敢えて出版することの意味を捉え直す、新たな視点を与えることにもなりえよう。

本稿は、「評価する者」としての山村暮鳥の分析から、「評価をめぐる概念系」、ひいては「詩をめぐる概念系」を、評価に荷担する者を含み込んだものとして明らかにする試みである。

二 評価の不可能性への自覚

山村暮鳥が、「詩を批評する」という行為の持つ問題に、極めて敏感な書き手であった

ことは、拙論において既に指摘したことである。³

山村暮鳥は、『仙台日々新聞』『秋田魁新報』『秀才文壇』『新評論』といった各種新聞、雑誌で詩の選者を担当するが、引き受ける際に必ず表明されるのが「評」の不可能性である。

『新評論』の評を引き受けた月の「選者妄語」（このタイトルも問題含みであるが）で、「多くの詩人のやうにコンモンセンスを尊重しない」から「選者として適当でないかもしれない」と前置きしつつ、暮鳥は以下のように述べる。

私に撰評されたつて其詩がよくなるのでも悪くなるのでもない。真価は宝石が貴婦人の指にあつたつて、スリの手にあつたつて変らないと同一です。⁴

「詩」自体の価値は「詩」そのものにあるのであって、批評とは無関係に存在すると暮鳥はいう。では、暮鳥にとっての「批評」とは何か。

——批評、若くは鑑賞。そは此の場合に於て私の勝手であります。諸氏及び諸氏の作、其物自らの持てる価値には何等の関係無きことであります。それに依て善くなるのでも悪くなるのではありません。⁵

詩の価値は、「評」があろうとなかろうと、それとは別個に存在することと同時に、「批評」は「私の勝手」に過ぎないこと、だからこそ、暮鳥の批評は、作品の現在の価値にも将来の価値にも関わらない、そうした「評の不可能性」がここで宣言されていると言っている。「評！そんな心が他人の創作に向つて持てるものではない、こればかりは誰一人の可能にも属せぬものである」⁶明治四十三年から大正四年までに暮鳥が選評を引き受ける際に見せる身振りは、必ず「評」の不可能性を含んでいる。⁷

ここには、「評」が、徹底的に「詩」の「外部」にあるという自覚がある。そのことは、川路柳虹への反論として書かれた「浅薄なる現実肯定を嗤ふ」において暮鳥が、「詩に対して、評者は常に理性的でありすぎると思ふ。彼は、詩の外にある。（中略）自分は複雑に生きてゐる単なる一個の生物である。そして、詩の内にをる」⁸という言葉からも読み取れよう。

三 「坑夫」としての「批評」行為

しかし、「評の不可能性」を述べながらも、一方で、「詩を批評すること」を暮鳥が引き受けていることも事実である。その場合、「詩を批評すること」はどのような意味を持つ行為として行われるのだろうか。

暮鳥は、詩を批評し、詩を選ぶ自分を「坑夫」に喩えた次のような文章を発表してい

る。ここで暮鳥は自らを「涙脆き丁字鋤手にせる坑夫」として、「何かを掘りあてる」ことを詩を選別することに喩え、詩を選ぶ行為を次のように記述していく。

あつまつた諸氏の創作は一抱へもありません。一々、丁寧に拝見しました。二度、繰返してそれを拝見する時には、始めてのその時より稍、冷性な気分を以て。

三度目には、その各の郷土を背景にまで描いて拝見しました。

日浴りの書齋を避けて、机を他に転じました。この間、秋田の横手からわざゝ贈られた椀椀がぶんゝゝ匂ひます。ともすればその誘惑が気になるので、それも遠ざけました。

さうして、机の右と左とに区別せられた右の方のを取り上げて数へると、たつた四十篇でした。

此の間に三日と五夜は経過しました。夜になると夜だから昼になると昼だから、明るすぎる暗すぎる。一体、どこが鑑賞と批評の適所だらう。否、それよりも先づさうして諸氏の作を拝見してゐる自分はどうか。自己を離れた選択があるのか。自然の影響のそれより、より以上自己に対する疑問が諸氏の作を眼の前にして嘆息を洩しました。⁹

長い引用になったが、ここにおいて暮鳥は、「批評行為」を行う際の「環境」を問題化している。三度、心持ちを変えて読み、三度目には作者の郷土のイメージを読解に挿入する。椀椀の匂い、昼夜の光線の違い、「匂い」「光線」といった「環境」が、批評に影響を与えることを自覚し、最適な環境を探していく。さらに、環境を変えたその上で、そもそも批評主体としての自己自身が、批評の際の環境要因となるのではないかと疑問を抱くのである。

ここには、批評主体が、決して批評の対象に対して客観的ではありえないことへの強烈な自覚がある。批評主体が作品に対して「外」に立ち得ない以上、どんなに環境を変えても結局意味はないのである。そしてまた、批評が、どこまでいっても様々な要因に左右され流動するものである点を捉え、「評の絶対性の不在」を自覚しながら、存在するはずもない批評の適所を探す自分を自ら記述するという意味で、この文章自体が極めてアイロニカルな批評的試みであるといえる。

このように、暮鳥には、第二節で確認した、本質的な「評の不可能性」とともに、環境や自己の状態によって評が変化してしまうこと、だからこそ、「評」が「私の勝手」にしかかなりえない、「評の絶対性の不在」に対する強烈な自覚がある。

もちろん、この信条を本当の意味で実践するのであれば、「選者を引き受けない」ことが、最も良心的な選択であるともいえる。にもかかわらず、引き受けてしまったからには、何らかの基準によって詩を選択することから逃れることはできない。

そう考えるならば、ここでの暮鳥の行動は、「評の不可能性を言及しつつ、評を遂行する」という種類の行為遂行であるといえる。「坑夫」の仕事を終えた暮鳥は、次のように

述べるのである。

私は、足投げいだして来し方をかへり見、罪深き所業に言ひ知らぬ恐怖を感じました。でも、残されし五篇を見れば、それは忽ちにして愉快であります。

この五篇を秀作とします。勿論、これは私のわが儘であります。¹⁰

「来し方」にあるのは、選択されなかった詩の「賽の河原」である。暮鳥はそれを顧みて「恐怖」を感じる。同時に、残された作を見て「愉快」と感じ、「秀作」と断言するのである。もちろん、ここには「私のわが儘」という留保がつく。

「評の不可能性」を自覚しつつ行われる選別への「罪悪感」と、「秀作」を選ぶことの「愉快」の同居。ここでの暮鳥の批評行為は必然的に二重化をはらむ。

さらにまた、こうした、理念としての評の不可能性に対する葛藤とはまったく別の次元において、暮鳥が、実践として強力に「評価」行為を行っていることも事実であることを忘れてはならない。暮鳥は、大正二年に「新詩研究社」を立ち上げるが、その広告には、はっきりと「社友の創作は懇切に批評添削して返送す」¹¹と書かれるし、暮鳥が主宰する詩雑誌『風景』においては、大正三年に「一般の投稿を歓迎し、その優秀なるものを撰抜掲載する」と宣言している。その意味で、暮鳥が持つ「評の不可能性」「評の絶対性の不在」という理念のレベルと、結社の立ち上げや雑誌の編集といった実践のレベルは、そう単純に一致するものではない。もちろん、筆者はその不一致を非難するつもりはない。どのような理念も、実践との絡み合いのなかで、矛盾や葛藤を抱え込むのは当たり前の話である。筆者が試みたいのは、その様態の記述であり、価値判断ではない。

こうした矛盾、葛藤をはらんだ多重性は、『聖三稜玻璃』刊行前後の「評価する者」としての山村暮鳥を検討するならば、さらに複雑になる。

四「投書界の革命」

『聖三稜玻璃』が刊行される四ヶ月前、大正四年八月の『秀才文壇』での選評で、山村暮鳥は、「投書界の革命」を宣言する。

ながらく自分の待ちのぞんでゐた時期がやうやく到来した。諸君がその翼をはつて空を飛ぶべき機会である。かゞやかに。

こんごの秀逸作は、諸君の天分をたかく且汎く推賞すべき方法として本欄に掲載するのである。

投書界の革命である。或る一種の固疾ありし階級の打破である。¹²

「投書界の革命」という言葉は、あまりに唐突である。ここにおける「革命」という

言葉は一体何を意味しているのだろうか。この発言を大正四年十月の「自分の推賞した作品も随分少くはない。自分はこんどそれらの作品をあつめて立派な詩集を世にだしたいと思ふ。無名の作家を紹介することにもなる」¹³という発言と併せて考えるならば、「評価者」が上から「選評」という視線によって眺めるのではなく、投稿された詩を「優れたものとして世に広める」視線から眺めるという視線変更が、従来の「選評」からのパラダイムチェンジであり、それが「革命」なのだと思えることができよう。従来の「選者」>「投稿者」の階層関係を打破し、「選者」—「投稿者」を同レベルに置くこと。それがここにおける「階級の打破」であり、「選者」と「投稿者」の従属関係に対する「革命」なのだ。

さて、とりあえず「革命宣言」の意味をそう捉えた上で、ここで暮鳥が突然「革命」を宣言したことを、どう捉えるべきだろうか。

まず、この試みを、山村暮鳥における「批評行為それ自体への問題意識から発する実験的試みの一つ」としてとらえる見方がある。

山村暮鳥はそれまでの「選評」欄において、「批評行為」に対するさまざまな実験的物言いを繰り返している。たとえば、大正二年八月の選評では、一々選評することをやめ、「各自相互の自由にゆるされた自己批評を、さらに痛切にしてもらはうとおもふ」¹⁴と、自らは語らないことによって、投稿者（あるいは読者）による自己批評に期待することが述べられるし、大正三年四月の選評では「以上の作者等それぞれ個性に根ざして詩を理解し且、作してゐる。私もそのつもりであまり立ち入って批評しなかつた」と、それぞれの作は作者の個性により作られたものだから、「個性」の領域に立ち入らないことが述べられている。¹⁵大正三年十一月には、「本号の作品に就ては、その欠点のみを指摘してみた。諸君の気を悪くしてその作をよくしたいためである」と言いつつ「次号にてはその特色のみをあげて評価しようと思ふ」¹⁶と、批評方法自体に対する実験的試みの宣言がなされている。

こうした流れの一部として、「革命」発言を位置づけることもできよう。すなわち、暮鳥における一連の「批評行為」の実験の一つとしてこの試みを評価するとらえ方である。

ただし、ここにおける「投稿者」と「選者」の関係を、額面通り「階級打破」と呼ぶにはやはり無理がある。「推賞」するのは、ここにおいても依然として「秀逸作」であり、その「秀逸作」を選ぶのは、やはり「選者」であることに変わりはない。事実、同じ記事において暮鳥は、大正四年七月に掲載した田中孤川の作品の評価を「まちがひ」であると断じ、「佳作の部も下の方」へと位置づけ直すのである。一方で「投稿者」の「革命」を言挙げしながら、同時に、「選者」としての権力は依然として発揮されているのだ。

さらに、この「革命」発言がなされた大正四年八月という時期は、暮鳥が主宰した雑誌のうち、『風景』が創刊された大正三年と、『LE PRISME』が創刊される大正五年の狭間にあり、ちょうど暮鳥が『聖三稜玻璃』の出版を準備しつつ『LE PRISME』の発行準備をしている時期にあたっている。

それを考えにいれるならば、ここでの「投稿者」の言挙げは、「革命」に名を借りた投

稿者への「誘惑」の身振りでもある。すなわち、投稿者の投稿・掲載への欲望に向けての戦略的な「誘惑」である。ただ、何度も繰り返すが、筆者はこの「誘惑」といった用語を、暮鳥の行為を貶めるために使っているわけでは決してない。筆者は、暮鳥が書き記したテキストを、それが書かれた状況と照らし合わせながら読み解いていく立場をここでとっており、雑誌経営や、詩集発行、その他、実践活動を行う際に不可避免的に問題になってくる経済関係や人的ネットワークの関係が、テキストにどのように刻まれているかを記述する作業を行っているだけである。

そうした観点で見ていくなれば、この「革命」は、大正二年の「新詩研究社」の発足や大正三年の『風景』における戦略の変奏された繰り返しと捉えることができる。大正二年十二月の「新詩研究社」の「広告」で、「社友の優秀なる創作をあつめて年四回」の頻度で「美装せる詩集（雑誌にあらず）」を刊行することがうたわれており、¹⁷『風景』がその実現の舞台となるシナリオがあったといえることは、拙論「『風景』は雑誌ではない」——山村暮鳥と詩雑誌『風景』にて論じた。¹⁸

そして、『風景』の刊行がなされていた時期、暮鳥は『秀才文壇』の「選評」欄にて、掲載される詩が「六号活字」の「気の抜けたやうな骨董品の文字」の間に掲載されることを嘆き、秀作を選らんで、造本、活字、紙質といった、物質的にも「詩を掲載するにふさわしい」媒体としてのこだわりを持った詩雑誌『風景』に掲載したいと述べていた。¹⁹もちろんこの言葉が、暮鳥の純粋な嘆きであることは確かであるが、投稿者の側からは、この言辭は『風景』という場の掲載への「誘惑」として機能しよう。

暮鳥は、大正四年十月に、『秀才文壇』のこれまでの投稿者に呼びかけ、「推賞」した作品を集めて「立派な詩集を出したい」から「有資格者」（すなわち、『秀才文壇』に掲載された者）で詩集出版に賛成のものは名乗り出て欲しいと述べる。²⁰投書界の「革命」宣言は、大正四年八月であり、このように考えてくるならば、ここにおける「革命」が、『聖三稜玻璃』の出版を控えつつ、²¹次なる雑誌としての『LE PRISM』を念頭においた投稿者への「誘惑」の身振りであると捉えることは十二分に可能である。

さて、このように、山村暮鳥における「投書界の革命」という宣言の意味を検討してきた。この宣言はまず、暮鳥における、「評」への問題意識から発していることは確かである。そのことは、暮鳥が、その「選評」において「読者相互の自己批評の試み」の薦めや、作者の「個性」を尊重するが故の沈黙といったことを繰り返していることから明らかである。その問題意識において、「評者」と「投稿者」の関係性を問題にし、「評者」>「投稿者」というヒエラルキーへの挑戦として「投書界の革命」を宣言したと受け取ることができる。その源泉に「評の不可能性」への意識があったことは疑い得ない。そもそも「評」を不可能であると定義するならば、「評者」を特権的な存在として位置づけることはそもそも不可能なのである。

しかしながら同時に、そうした宣言が、実際に、この時点における評者と投稿者のヒエラルキーをただちに变革するものではありえなかったこと、そしてまた、詩集を発行し、詩雑誌を刊行する者としての山村暮鳥の立場を考えるならば、ここにおける「革命」

は同時に、投稿者への「誘惑」の言説として機能するべく送り出されていたことも確かである。

第三節、第四節を通し、「評価」をめぐる山村暮鳥の振る舞いを、当時の状況と併せて考察するならば、そこに見えるのは、概念系と実践系をめぐる葛藤、矛盾、亀裂のありさまである。

山村暮鳥が、「評の不可能性」「評の絶対性の不在」という意識を徹底的に持っていたのは確かである。しかしながら、「評の不可能性」を語りつつ「批評行為」を行うこと。そしてそれが「添削」の実践と同時並行で行われていたこと、また、詩雑誌を出版する際に不可避な選別の問題、また、結社の立ち上げや雑誌の発刊をめぐる「投稿者」への「誘惑」の問題とも無縁ではない中で行われていたことを考え併せるならば、ここでの問題は、暮鳥の発言それ自体だけを「言葉通り」に捉えて済まされる質のものではないことは明らかであろう。そうではなく、こうした複合した状況の中で、暮鳥が「批評する主体」として、同時代に介入していた、そのありさまをできる限り多様な要素を関わらせつつ論じていくことこそが、必要なのである。

五 『聖三稜玻璃』を山村暮鳥が「評価」すること

さて、ここまで論じてくるならば、山村暮鳥が刊行した『聖三稜玻璃』において、暮鳥本人がほとんどその意義を語らなかつたことの意味を、ひとつの可能性として考えることができる。

前節までの議論を総合するならば、山村暮鳥において、「評の不可能性」「評の絶対性の不在」という問題意識があり、「評価する者」としての山村暮鳥は、「詩の評価不可能性」という立場から、自分の「評」は「勝手」に過ぎないと断じる発想を表明していた。「評価される者」として、山村暮鳥がこの理念を破綻無く持ち続けたとすれば、「評の不可能性」の理念は、他人が自分の詩をどう評価しようが勝手であり、他人の「評価」の「勝手」さに、暮鳥自身は反論できないという、暮鳥自身をも縛る機制として働くことになる。評価は「評価する者」の「勝手」であるという理念を、自分に向けられたものに対して誠実に適用するのであれば、誰がどのような意見を述べようが、それは当人の「勝手」であると受け止めるほかはない。

大正四年九月の小山義一宛封書にある、「小生は今の文壇乃至思想界のために、ばくれつだんを製造してゐる」「此の詩集、今世紀にはあまりに早き出現である、千年万年後の珍書である。これ小生の詩集にして小生のものならず、即ち人間生命の噴水である、その聖くして力強きをみよ——」²²といった力強い宣言を、自身が積極的に発信しなかつたのはなぜなのか、かつて川路柳虹に批判された際に反論した「浅薄なる現実肯定を嗤ふ」²³といった文章が出なかつたのはなぜなのか。これは、『聖三稜玻璃』を論ずる上で、極めて重要であり、なおかつ答えることの困難な問題である。

山村暮鳥が、「評の不可能性」「評の絶対性の不在」を、強固な信念として内面化していたのであれば、『聖三稜玻璃』出版後に、自身が、他人による「評」に異議を唱えることが、自分が行ってきた理念に反するものという考えに至る可能性がないわけではない。ただし、一方で、『聖三稜玻璃』出版による悪評の多さに、沈黙を強いられたという見方も、十分妥当な見方として存在する。

しかしながら、『聖三稜玻璃』刊行と同月の大正四年の十二月に暮鳥は、「いまの黴臭い芸術壇にダイナマイトを投じてその純真に酔はんとする同志のために扉は自由にひらかれてある」²⁴という記述をし、『聖三稜玻璃』刊行後の大正五年の四月には、「LE PRISME」発行の予告として「自分らは此の沈滞せる芸術界に火を放つのである。放火犯人たらん者の入社を望む」²⁵といった、小山宛の手紙に呼応するような記事を、暮鳥は出している。こうした発言を踏まえるならば、暮鳥において、『聖三稜玻璃』の悪評が、ただちに「沈黙」につながったとストレートに信じるわけにもいかない。暮鳥は、『聖三稜玻璃』刊行後も「ダイナマイト」なり「放火犯人」といった言葉で「芸術界」を挑発しており、ここで、『聖三稜玻璃』の意義を自ら言挙げすることが不可能な状態であったわけでは決してない。また、大正五年三月に『秀才文壇』で「選外佳作」「選外」の作を、次月に改めて格上げして紹介し、その行為を「自分の軽率」ではなく、「正反対である」と述べていることは、²⁶「評の絶対性の不在」という観点からの「誠実さ」と捉えることができ、ここにおける山村暮鳥の評価観に、この時点で揺らぎがないことは確認できる。

これらを考え合わせるならば、暮鳥が、「半面自伝」で語ったような、いわゆる『聖三稜玻璃』への悪評によって、「自分の芸術に対する悪評はその秋に於て極度に達した。或る日、自分は卒倒した」²⁷といった転回を即座に行ったわけではない。また、ここにおける「自分の芸術への悪評による卒倒」のくだりは、『小さな穀倉より』が出版された際に書き加えられたものであり、むしろ、山村暮鳥自身が流布した物語と考えた方がよい。

28

もちろん、『聖三稜玻璃』に対する世評に対する暮鳥の沈黙が、「評の不可能性」「評の絶対性の不在」の信念からのみ発したものであり、それが唯一の機制であると断言することには無理がある。たとえば、大正五年三月に、「作詩発表に就て思ふ所あり、今後の自分は東京及び地方一切の新聞雑誌に於て」行わない、²⁹と宣言する一方、翌月にはそれを「食言の罪に苦しんである」と言いながら撤回するなど、³⁰この時期、暮鳥のスタンスに大きな揺れがあったことは確かである。

山村暮鳥の詩風の変遷の原因、といった、非常に大きなテーマに真正面から答えることは、この小論の範囲を超えているし、そこにおける「原因」はどこまでいっても可能性のレベルでしか語れない質の問題であろう。その問題は措いた上で、「詩を評価する者」として山村暮鳥の「批評観」を観測する限り、その「評価観」は、少なくとも大正五年末までは変化していない。

では、その後も暮鳥の「評価観」は変化し続けることはないのか、と言われれば、答

えは否である。この後、大正六年に至り、「詩を評価する者」としての山村暮鳥の「評価観」は劇的に変貌する。そして、この変貌は、今までの暮鳥の「評価観」を根底から覆すほどの大きな変革なのである。

次節においては、大正六年以降に観測できる、山村暮鳥の評価言語の変貌を論じてみたい。

六「個性」と「普遍性」

これまで論じてきたように、山村暮鳥は、「評の不可能性」「評の絶対性の不在」また、「批評行為自体への問題意識」を明治四十年代から大正五年にかけて持ち続けてきた。

しかしながら、「詩を評価する者」としての山村暮鳥の発言は、大正六年付近を境に変貌を遂げる。そしてその変貌は、今までの「評価観」を根底からひっくり返してしまうほど大きな変貌なのだ。

例えば、大正六年四月、山村暮鳥が萩原朔太郎の詩集『月に吠える』を論じた文章を見てみよう。

ああこれは何といふ芸術だ。この個性はおよび難いものだ。しかし個性はそれがいかに大きなものであつても遂に相対的である。(中略)君の今後の作品はどんなものか。それはきつと普遍性の豊かなそして健康体のものだ。自分はそれを望んで止まぬ。なんとなればその普遍性が絶対的になった時にはじめて真の個性はその相対相を離れて永遠性を帯びきたるからである。³¹

ここで暮鳥は、萩原朔太郎の詩を「および難い」個性と位置づけつつも、「個性」は相対的なものであるので、今後の朔太郎の詩の行方が「普遍性」に向かうと予想している。そして、「普遍性」が「絶対的」になることにより、「個性」が「永遠性」を帯びると暮鳥は説明するのだ。これまでの暮鳥の批評において、「個性」が論じられたことがないわけではない。しかし、第四節で検討した「個性」は、「それぞれ個性に根ざして詩を理解し且、作してある」からこそ「立ち入って批評しない」というスタンスで語られるものとしてあった。すなわち、「個性」は各人の持つ価値観であるから、そこに立ち入ることをしない、という立ち位置であったのである。³²ところが、『月に吠える』への評価において暮鳥は、「個性」は「相対的」なものであるから、それを「普遍性」「絶対性」へ引き上げるならば、「真の個性」が「永遠性」への獲得へつながるはずであり、自分はそれを望むという、これまでとはまったく異質な道筋が描かれているのである。こうした発言に「評の不可能性」や「評の絶対性の不在」という理念が入る余地はまったくない。その意味で、ここで暮鳥が「普遍性」「絶対性」「永遠性」を持ち出すこと自体が、これまでの「評価軸」からの「転向」とも言えるべき事件なのだ。

そして、こうした語り口は、大正六年以降のその後の山村暮鳥の語り口を支配してい

くものなのである。

自分は個性を尊重する。特に詩の初心者のそれをいたいたしく取扱ふ。然しそれだからとて作品の当然持つべき普遍性を見落としはしない。それが時代錯誤であるやうなものはどしどし握りつぶしにしてしまふ。作者のためでもあり詩壇のためでもあると思ふ。³³

「個性」を尊重しつつ、その底流に「普遍性」が存在することを要求すること。そしてそれが時代錯誤であるならば「作者」のため「詩壇」のため握りつぶすこと。これが可能になるのは、「批評する者」である暮鳥が、「普遍性」を見抜く能力を持っており、「評価」の確固とした判断基準を持っていると確信している場合だけである。そうでなければ、作者や詩壇のためとして握りつぶす「確信」を持つことはできない。ここにおける暮鳥の「評価観」は、第四節までで確認した評価観とは明らかに断絶しており、異質である。³⁴

山村暮鳥は、大正八年から童謡の選評を始めるが、そこにおける語り口も同じ評価観を観測できる。「童謡」というジャンルの違いはあれ、童謡の「選評」において、確固たる評価基準を持っているのは山村暮鳥であり、「暮鳥」—「童謡の制作者」の上下関係は決して揺らがない。そして、第四節までに確認したような、「評の不可能性」を前提とした語り口が出てくることはない。

諸君が努力の、たくさんの応募童謡を一つ一つていねいに見てゆく選者の心持は、まるで釣でもしてあるやうだ。何が釣れるか、どんな大きなものがかかるか。そして佳作をみつけた時のそのうれしさ。³⁵

詩を選ぶことを、「釣り」に喩えているが、ここに、釣られないものに対する配慮は一切ない。この引用を、大正三年の次の「釣り」の喩えと比べれば、その差は一目瞭然である。

再び、机の上をみた。そして私はそこに、猫、釣られねばならぬ美しい魚のをるのを知った、私の残忍な釣によつて——

そして三十篇を得た。それに対して、更に、眼を見張った。その結果、十三篇だけが幸にして犠牲をまぬかれたのである。³⁶

「何れも捨てがたい」ものから「つらい思ひ」で詩を選ぶ。それを暮鳥は「残忍な釣」と表現した。こうした、「選ぶ」ことに対する躊躇、迷い、罪悪感、前者の「釣り」は一切見ることができないものである。もちろん、この引用においては、子供を対象と

した「童謡」というジャンル、および『おとぎの世界』という発表媒体の問題は大きい。しかしながら、この評価観の変更が、単なる「童謡」「詩」というジャンルの問題を越え、山村暮鳥の持つ「評価観」自体の変貌の問題であることは、大正六年以降の暮鳥の「詩の評価の仕方」を見ても確認できることだ。

山村暮鳥の詩風の変遷を、断絶と捉えるか、連続性を見いだすかは、暮鳥研究において大きな課題のひとつであるが、「評価する者」の視点から見る限り、萩原朔太郎の『月に吠える』が出版された大正六年二月以前の暮鳥の「評価観」とそれ以後の「評価観」は明らかに断絶している。そしてまた、その断絶に「個性」を通じた「普遍性」という概念の出現が見られることは、ある時期において、暮鳥が、個々の「個性」の底流としての「普遍性」という「評価軸」の概念系に参入したことを意味する。

もちろん、ここでいう「断絶」をすぐに暮鳥の詩の表現における断絶に直結させること、および不用意に接続させることには大きな危険がある。その意味で、本稿の分析は、あくまでも山村暮鳥の「評価観」の問題であり、それ以上でもそれ以下でもない。本稿の分析を、暮鳥の詩作活動とリンクさせていくためには、本稿で行った作業の上に、さらに網の目をかけ、「詩を書く者」としての山村暮鳥をめぐる関係性を織り込んでいく必要がある。また、本稿で明らかになった暮鳥における評価軸の変貌は、より広い文脈における思想状況の変化が背景にあったことも考慮の対象に入れなければならない。ここでの暮鳥の確固たる「批評観」そして「普遍性」を背景とした「個性」の発言の図式は、極めて「大正的」なものであり、そうした大正における「個性」「普遍性」の図式に、山村暮鳥がどのように組み込まれたのかが、ここにおいては問題となろう。³⁷

七 結論

詩というジャンルに限らず、文学作品を生産する者が、文学を評価する立場に立たされることは、もちろん時代や分野による違いはあれ、頻繁に発生する出来事である。そうしたときに、「書く者でもありつつ、書かれたものの価値を判断する者である」ことが、「書き手としての主体」と「評価者としての主体」の分裂として問題になってくる。もちろん、それがまったく問題にならない場合もあれば、決定的な主体性の亀裂を生む場合もあり得よう。

本稿で用いた方法論は、特に、密なネットワークでつながれた文学の場において、有効な分析手法となる。「詩人」を「評価される」視点ではなく、「評価する存在」としての視点から眺めること。詩人ネットワークの中にいる詩人であれば、詩をめぐる「評価する／評価される」状況に投げ込まれた存在であることから無縁ではられない。そうであれば、「評価されるものとしての詩」だけを検討するのではなく、「評価する者」として詩人を検討し、詩人をめぐる「評価する／評価される」網の目を明らかにすることは、詩を「書き／読む」コミュニティの様態を明らかにする上で、極めて重要な作業なのである。

「詩の評価者」としての山村暮鳥の振る舞いを分析すること。その過程において、「評価行為」は、単なる理念のレベルにとどまらず、詩人のネットワークの構築や、詩雑誌の刊行に直結する、実践的な「行為」としての力を発揮する種類のものとしても機能する。その様態を丹念に分析することは、詩が生産される現場を、多様で複雑な系の絡み合いとして記述する試みに他ならない。

本稿は、「山村暮鳥」を基準点とし、「評価する者」の視点から「山村暮鳥」の「批評観」を、「批評観」そのもののレベルにおいても検討しつつ、暮鳥が取り巻かれた状況とも関わらせ、暮鳥における「批評行為の意味」を、可能な限りその「状況の中において」分析した。この分析により浮上したのは、「理念の問題」としてだけで片付けることのできない、暮鳥の「批評行為」が引き起こした概念系、実践系の複雑なありようである。本稿では山村暮鳥以外の発言を取り上げることはなかったが、これらの発言は、周囲を取り巻く様々な発言と密接に絡み合っている。その絡み合いを絡まった状態のまま記述すること。そのことが「詩をめぐる概念系のありよう」を明らかにするために、必要なことなのである。

1 山村暮鳥「長詩小曲 通信教授」(『詩歌』 大正二年十二月)

2 「詩を選ぶ」ことと、雑誌の運営、経営の中での葛藤関係については、拙論「風景」は雑誌ではない——山村暮鳥と詩雑誌『風景』(『雲』第15号 2010.9)を参照されたい。

3 前掲、「風景」は雑誌ではない——山村暮鳥と詩雑誌『風景』 pp.6-7

4 山村暮鳥「選者妄語(長詩)」(『新評論』 大正四年五月)

5 山村暮鳥「自問自答——撰評の後——」(『秀才文壇』 大正二年一月)

6 山村暮鳥「雑感より」(『仙台日々新聞』 明治四十三年九月十三日)

7 『羽後新報』において、山村暮鳥は、「Q 兵衛さん」への返答として「君は作者は『作る』以外に何等の権利もないそれが優劣は偏へに評者の鑑識にあると言ふ、君それでは作者は評者の奴隷のやうなものだね」という発言もしている。(山村暮鳥「へぼ詩人より」(『羽後新報』 明治四十三年四月十二日))

8 山村暮鳥「浅薄なる現実肯定を嗤ふ」(『詩歌』 大正二年十二月)

9 山村暮鳥、前掲「自問自答——撰評の後——」

10 山村暮鳥、前掲「自問自答——撰評の後——」

11 山村暮鳥、前掲「長詩小曲 通信教授」。もちろん、こうした「添削結社」は、他の詩人も各編集雑誌で行っていたことであり、同時代に共通した「詩の結社」のあり方の一つの形であるということ是可以する。

12 山村暮鳥「長詩選評(二)」(『秀才文壇』 大正四年八月)

13 山村暮鳥「長詩選評(五)」(『秀才文壇』 大正四年十月)

14 山村暮鳥「長詩評 五」(『秀才文壇』 大正二年八月)

15 山村暮鳥「詩欄選評(一)」(『秀才文壇』 大正三年四月)。時代は多少下るが、大正七年を中心とした「詩の作り方」を教える書籍群において、詩と「個性」がどのように関連づけられたかに関しては、拙論「詩の作り方を教へることは出来ません」——大正期「詩の作り方」が生成する「詩」概念についての一考察(『kader0d』第6号 印刷中)を参照されたい。

16 山村暮鳥「詩欄選評(四)」(『秀才文壇』 大正三年十一月)

17 山村暮鳥、前掲「長詩小曲 通信教授」

-
- 18 拙論、前掲「「風景」は雑誌ではない」——山村暮鳥と詩雑誌『風景』 pp.5-6
- 19 山村暮鳥、前掲「詩欄選評（四）」
- 20 山村暮鳥、前掲「長詩選評（五）」
- 21 『『聖三稜玻璃』 広告文』は、大正四年九月には『銀磬』に掲載されており、大正四年十月には、『詩歌』に掲載されている。
- 22 大正四年九月一五日 小山義一宛封書。
- 23 山村暮鳥、前掲「浅薄なる現実肯定を嗤ふ」
- 24 山村暮鳥「長詩選評（九）」（『秀才文壇』 大正四年十二月）
- 25 山村暮鳥「長詩選評（十二）」（『秀才文壇』 大正五年四月）
- 26 山村暮鳥「長詩選評（十一）」（『秀才文壇』 大正五年三月）
- 27 山村暮鳥『小さな穀倉より』（白日社・感情詩社 大正六年九月）
- 28 また、『小さな穀倉より』の単行本版においては、『聖三稜玻璃』が大正五年一月に出版されたことになっている。これは微細な違いであると言え言えるが、『小さな穀倉より』の文脈では、大正五年の『聖三稜玻璃』の出版、「プリズム」の一年での廃刊、暮鳥への悪評の高まりを、大正五年における一つのシーケンスとして読まれうる書き方がされているといえることができる。
- 29 山村暮鳥、前掲「長詩選評（十一）」
- 30 山村暮鳥、前掲「長詩選評（十二）」
- 31 山村暮鳥「「月に吠える」について」（『詩歌』 大正六年四月）
- 32 山村暮鳥「詩欄選評（一）」（『秀才文壇』 大正三年四月）
- 33 山村暮鳥「選後に——」（『いはらき』 大正六年九月十六日）
- 34 大正八年五月の『『苦惱者』の言葉 五』では、「すべての芸術は個性から生れる。個性の表現である。個性の表現であるがその個性がひとたび表現されると直に普遍化する」とより直裁に表現されている。（『『苦惱者』の言葉 五』（『苦惱者』 大正八年五月）
- 35 山村暮鳥「童謡選評（2）」（『おとぎの世界』 大正八年十一月）
- 36 山村暮鳥「詩欄選評（一）」（『秀才文壇』 大正三年四月）
- 37 この点に関しては、拙論「「詩の作り方を教へることは出来ません」——大正期「詩の作り方」が生成する「詩」概念についての一考察」（『kader0d』第6号 印刷中）を参照されたい。

※引用はすべて『山村暮鳥全集 第四巻』（筑摩書房 平成二年四月）によった。